



〈歌・小説・日本語〉⑬

## 松本徹 『西行わが心の行方』をめぐって

勝又浩

表題にあげた松本徹の『西行』（鳥影社刊）を読んでいろいろ刺激を受け、考えるところもあつたので、今回はそのことを書いておきたい。

本書は既に「毎日新聞」（平成30年7月29日）で三浦雅士が取り上げ、「名著である」と紹介している。具眼の士の讃辞に、この本の成立を傍で見えた一人である私としても嬉しい思いをしたのである。そして、追いかけて通読して、この一冊が松本徹のこの種の仕事のなかでも極まった「名著」の一つであることを改めて実感した。「一つ」だと言うのは、私は、彼の仕事のなかでは『風雅の帝光嚴』（平成22年）が各別な「名著」だと思っていて、その

思いはこの西行論を読み終わった今も消えてはいないからである。いや、もう少し客観的に言えはやはり、あの『風雅の帝光嚴』の仕事があつたからこそ、この『西行』も成つたのだと見るべきかもしれない。

本書を読みつつ思い出した著者の仕事に『崇徳院』（平成2年5月）「文學界」、いま『師直の恋』に収録）もあつた。そこにももちろん西行が登場していたが、今度は主人公が入れ替わつたわけである。だが、かつてのこういう仕事、この『西行』のなかにも生かされて熱い血となつて流れているなども思つたのである。そんなふうには、本書はいろいろな面で著者のこれまでの

仕事の集大成だという性格が強いのだ。まず、この書は西行を充分に歴史のなかに置いて見、捉えているが、そのことだけでも類書のなかでは際立っているだろう。ここで蛇足すれば、歴史小説のなかの西行はおおむね歌人西行というパターンが描かれるだけであるし、逆に歌人西行を論じたものは、彼が平清盛と同じ北面の武士の出であり、同じ戦乱の時代を生きた人物であつたことを忘れているのがほとんどだからである。そうしたなかで本書は、ときに宮廷の政争や高野山内の宗派の争いにも巻き込まれながら生きる西行をいかに捉え、描いている。

著者の歴史小説は主人公ゆかりの地を訪ね、変貌した現在のその場に立つて見るという方法を一貫して取っている。それは単なる歴史散歩ではなくて、歴史を現代から見直し考え直すという行為や意味に重なっている。そうした方法が今度の主人公、生涯旅の人であり、移動の人であつた西行にぴつたりはまつたということもある。とくに西行の歌は、俊成、定家などとは対照的

に、いわば土地土地の霊と深く繋がつていたからである。その場に立つて、呼び起されるように歌が生まれ、そして生まれた歌は地の霊を背負いながらも地から独立してゆく。

波の音を心にかけて明かすかな  
苦洩る月の影を友にて

安芸厳島へ向かう途次、「なかとみの浦」で風のために足止めにあつたときの歌である。

この本のなかの名場面が幾つもあるが、なかでも終局の、比叡山の無動寺へ慈円を訪ねたときの一景などは、あたかも西行歌の頂点と一体となつて美しい、忘れがたい場面を描きあげている。

しかし、この書のもっとも重要な性格は西行を「歌僧」と呼び、終始そうした観点から彼の歌を読もうとしていることだろう。西行は同時代の人たちの認識から言えば、まず、突然出家した二十三歳の北面の武士であつて、そういう人物がやがて歌人としても頭角を現してきて知られるようになった、

という順序であつた。初めから歌人であつたのでは、歌人が出家したわけでもなかつたのだ。ところが、後の大歌人として言われる西行は、とかく出家者としての側面が忘れられている。西行の歌は歌のために詠まれた歌ではなかつた。彼にとつての和歌は何よりも仏教的真理の発見とその表現や伝達のための手段としてあつた。しかし読む方が仏教からどんどん離れてしまったためにそれが読み取れなくなっているのが現代なのだ。

たとえばよく知られた「願くは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月の頃」の一首にしても、それによつて西行の桜好きを言う人は多いけれど、その「きさらぎの望月の頃」の二月十六日（現在の太陽暦では三月三十日）が実は涅槃会、つまり釈迦の入滅の日だと知る人は案外少ないのだ。この「願くは」は花と月ばかりではないのである。

もちろん、「歌僧」としての西行の研究もたくさんあつて、そうしたなかで私が最も信頼するのが山田昭全の『西

行の和歌と仏教』であるが、その点では著者と意見が合つて何度も話に出たのである。本書には山田昭全からの引用や言及が度々あつて、異論も書かれているが、逆に言えばそれほど山田観点を取り込んでいくわけだ。

西行が「心」の歌人だとは多くの人が言うところだ。そのため、たとえば吉本隆明の西行論などは西行以前の歌から「心」の用例を統計的に抽出して西行のそれと比較して見せている。しかしそれは、私から言わせればまことに迂遠なやり方だと言ひしかない。西行歌の「心」とは、その向こうにいつも「月」がある。「心」なのだ。むしろこの月は真如の月、仏教的な真理世界の象徴である。この「月」を曇りなく映す「心」を持つために、西行はいつても己の心を磨き、放ち、ときに嘆き、言い聞かせ—つまり修行していったのだ。彼の歌は、言うならばそんな月に向かつての祈りであり証であり、体現であり伝達であつたのだが、そうした西行歌の「心の行方」を、この一書は説得力を持って跡付けている。



〈歌・小説・日本語〉⑳

## 西行短歌の歴史的意義

勝又浩

は、その問題を私なりに砕いて言ってみたい。

まずは冒頭に言われた「富士の煙の歌、鳴立つ沢の歌」を念のため挙げておこう。

風になびく富士のけふりの空に消えて行方も知らぬ我思哉  
心なき身にもあはれは知られけり  
鳴立つ沢の秋の夕暮れ

歌の成立年代としてはここに挙げたのとは逆の順になる。「心なき」が最も古く、また西行の名を早く世に知らしめることになった一首である。定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」、寂蓮の「さびしさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕暮れ」とともに「三夕の歌」と称されて昔から重要文化財のような扱いを受けているが、小林秀雄に言わせれば他の二首は単に審美家が選んだ景色に過ぎない。「三夕の歌など出鱈目を言い習わしたものである」（『西行』）ということになる。ついでに言うところ、「鳴立つ沢」の「鳴立つ」は飛び去った、なのだが、大岡信が『折々のうた』

前回紹介した松本徹『西行 わが心の行方』（鳥影社）の最後の章に、西行最晩年の一首、

にほてるやなぎたる朝に見渡せば  
漕ぎ行く跡の浪だにもなし

について説き、論じたあと、その当然の帰結のようにさらりと書かれている次の一節がある。

すでに触れた、富士の煙の歌、鳴立つ沢の歌と響き合ふのはいふまでもあるまい。さうしてわが国の精神の在りやうについて、決定的な考へを据ゑたと思はれる。すなはち、一般に言はれると異なつた「虚」であり「空」であつて、清浄の気が満ち、そこには花が咲き、月がまどかに照

り、伊勢の大神が「肥や」される……。

私は読んでここに至つて、うーんと、まさに唸るような思いをした。我々はいづい慣れすぎて西行を特異な歌人、好きな歌人に数えるくらいでそれ以上のことをあまり意識せずにいるが、本当は、日本の精神史のうえでも短歌の歴史のうえでも画期的、革命的と言つてもよい仕事を果たした人なのだ。「わが国の精神の在りやうについて、決定的な考へを据ゑた」人―西行の場合、たとえば源実朝が時代を突き抜けた優れた歌人だつたと言ふのはまるで意義が違ふ。そういうことを、ここで松本徹は指摘しているわけだ。今ここで

で、じつと立っている姿とも読めると書いていて、山田昭全が、分かつてないな、と一蹴していた。鳥道とか飛ぶ鳥跡を濁さずとは仏教での慣用語、何の生きた痕跡も残さず消えて行く、この世の「空」なる真実のことなのだ。じつと立っていたのでは他の二首と同じ、ただの景色のことになつてしまう。

次の「風になびく」は、二度目のみちのくの旅のとき、六十九歳の作とされているが、西行自身が自讃歌の第一に挙げていることから、西行辞世の歌、心の歌の帰結だと読む人も多い。しかし私は、それには少々不満である。富士の煙はたしかに沢の鳴と同じように姿を消しているが、「行方も知らぬ我思哉」で、ここにはまだ「いかにかすべきわが心」の西行が残っているからだ。そしてそう言えるのは、三首目「にほてるや」があるからなのだ。

「にほてるや」は沙弥満誓の「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白浪」を本歌としていうことが知られている。この歌は、言うならばまだ「空」に到らない、「川の流れは絶

えずして」にも似たレベルの無常観を詠つたものと見てよいであろう。たとえば鳴立つ沢に水音や水紋が残つていては正しい鳥道の表現にはならない。だから西行はその「白浪」をさらに消してしまつたのだ。そこに彼の「思い」の徹底ぶり、思想的な到達があると見るべきであろう。

このことは、たとえば一遍上人が「となふれば仏もわれもなかりけり南無阿弥陀仏の声ばかりして」と詠んだのを、法燈国師が「未徹在」と言つて一喝、直ちに頓悟した一編が「となふれば仏もわれもなかりけり南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と改めたエピソードと事情がよく似ている。見ている自分、言っている自分も消えて初めて「空」たる真理の「道取」＝表現になるのだ。西行で言えば、満誓の「白浪」を消したように、「にほてるや」に到つて、彼らもう「行方も知らぬ我思哉」をも棄てたのである。

話が少しばかり飛びすぎたかもしれない。私が言いたかったのは、「にほてるや」の一首が、よく言われるような

「明鏡止水」の境地を言つたというようなものではなく、仏教的な「空観」の表現なのだというところ、そして、そう読んだところに、松本徹の「わが国の精神の在りやうについて決定的な考へを据ゑた」という評価も言われたのだということである。ちなみに前記松本文中の「虚」であり「空」であつた「虚空」の語は、明恵上人が聞いたと伝える西行自身のことば、「白日かはやけば虚空明らかなるに似たり」「我又此の虚空の如くなる心の上において、種々の風情を色どると云へども、更に蹤跡なし。此の歌即ち是如来の真の形跡也」から採っている。松本徹は西行のこうした三首をもつて西行論の中心思想としているわけである。

西行は叙景詩としての短歌を象徴詩に変え、抒情詩としての短歌を思想詩にせり上げたが、こういう西行がいたから後の芭蕉句も生まれたと言つてよいであろう。そこにさらに付け加えれば、西行は短歌のみならず、近代文学にも通ずる日本の文学観の基礎をつくつた人だと私は思っている。



〔歌・小説・日本語〕②

# 日本文学の根幹をつくった西行

勝又浩

孔子は、「文学を含めて中国文明の創始者」だと吉川幸次郎が書いている。

『新潮世界文学辞典』これを初めて読んだとき、そんな言い方があるのか、できるのかとびっくりした。そしてその意味を考えて眩暈がしそうになったが、そのことを言いだすとときりがない。要するにこれはキャッチコピーみたいなものだと思うことにして、だんだん納得するようになった、とだけ付け加えておこう。

そこで、この大胆な物言いに倣って、私はかねて、「西行は日本文学の根幹をつくった人」だと考えてきた。近代も含めて、西行歌は日本文学の根本性格をつくっているのだ。今回はそのこと

を書いておきたい。

まず、彼の絶大な人気という事実がある。文芸作品で言えば能の「江口」「西行桜」あたりから始まって長唄の「時雨西行」から落語講談の「西行」まで、さまざまなジャンルで西行は取り上げられている。観阿弥作とされる「江口」は「山家集」にみえる実話をもとにしているが、お坊さんと遊女という取り合わせ自体がいかに説話的な趣を持つていて、そこに既に西行人気の秘密、その第一要因があるのかもしれない。

次に、彼が旅の人でもあった故だろうか、あちこちに西行桜、西行柳、西行庵なるものが伝わっているし、それ

そうだが、西行人気の第一原因は、やはり彼が桜の歌人だったからではないだろうか。これは、なーんだであって、しかし、実は大事なことだろう。

吉野山梢の花を見し日より心は身にも添わず成にき

こうした桜狂いの西行のなかに、人々は自身の心情、夢や憧れを実現している人、自分の代弁者代償者を見ているのだ。小林秀雄もその典型だと言ってよいが、西行論を書く人は皆とうほど桜好きでもある。そして、そういう人にとつては、

願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月の頃

と、これが決定的に泣カセルことになるのではないだろうか。「敷島の和心を人間はば朝日にほふ山桜花」（本居宣長）であって、桜は日本と日本人の心を象徴する花だが、そういう心情を、「願はくは…」の一首ほど美しく現わした歌は他にないだろう。

人気の秘密のもう一つは「道」、西行歌の求道性ということであるだろう。芭蕉は、歌の西行、連歌の宗祇、絵の

に付随してさまざまな伝説も各地に残っている。旅の途次、西行が土地の子供にやり込められて道を引き返すという「西行戻り」と言われるパターンの話があちこちにあるのだという。もっとも知られているのが、「西行物語」にある、鎌倉で頼朝から拝領した銀製の猫を追ったの子供にやってしまったという話だが、どちらも子供が絡むところがポイントだろう。もう一人の人気詩人僧であった良寛の場合と同様、伝説への子供の登場は大衆的な人気の良きバロメーターなのだ。

ここで問題は、何故これほど人気があるのかということだが、そこがなかなか難しい。落語にもなっている、北面の武士佐藤義清が身分違いの恋の果てに出家したという話は謎も含んで面白いが、それだけが人気の原因だとは言えないだろう。気を付けてみているが、西行を論じた人はたくさんいるのに、誰もその人気を当然の前提にするばかりで、何故かと考えている人はいなかった。

しかし、なーんだと言われてしま

雪舟、茶の利休と名をあげて、「其貫道する物は一なり」（『笈の小文』）と言った。歌には柿本人麻呂や山部赤人等々、大歌人がたくさんいるなかで、芭蕉はなぜ西行をとったのか。おそらく西行が、そうした大歌人たちからは隔絶した、歌の改革者だったという明確な認識が彼にあったからだろう。

西行が「心」の歌人であり、その心は恋や季節を思う心ではなく、仏教的な求道者としてのそれである、とはすでに言った。ここでは心理家であり強靱な自意識の人であった西行という面を見ておこう。

世中を夢と見る／＼はかなくも猶おどろかぬわが心哉

迷ひ来て悟りうべくもなかりつる心を知るは心なりけり  
こんなところははずつと後の『徒然草』にも通ずるだろう。

心から心に物を思はせて身を苦しむる我身成けり  
憂き世にはあられば有にまかせつ、心よいたく物な思ひそ  
こういうところは、さらに遙か後の

良寛にも通ずるかもしれない。

こんなふうには西行の「心」は自意識であり、精神であり、魂でもあったのだが、こうした心の実存を詠った例は西行以前にはなかったのである。歌の近代は西行から始まった、と言ってもよいのだ。言い換えれば、歌を、己を磨く手段とも証としたのだが、芭蕉が尊重したのはそういう西行だったに違いない。だから二人を合わせて言ってみると、文学を意識的に己の生き方と結びつけて実践したのが西行と芭蕉だったのだ。そして以後、この性格は日本文学の基底を成す一つの伝統となつて、それは近代になつても受け継がれたのである。

西行は近代の文学者のなかでもダントツの人気歌人だ。それは、少々飛躍したもの言いになるが、西行歌は日本の近代文学のもう一つの原点源流だからだ、と言ってよいであろう。

前に私は、上田三四二のことばに重ねて、「短歌は日本文学の底荷」だと言ったが、その底荷の重要な部分に、こうした歌人僧西行が存在するのだ。



〈歌・小説・日本語〉⑫

# 露伴の西行

勝又浩

松本徹『西行わが心の行方』（鳥影社）に刺激されて、長年抱えていた私の西行観を書いてきたが、勢いに乗って仲間たちのところでもこれらの話をした。そこでいつもの通り疑義やヒントやらを貰うことになったが、その一つに、幸田露伴に『二日物語』（明治三十五年）があるよという情報があった。教えてくれたのは能楽の西野春雄だが、彼は廃曲『松山天狗』—崇徳院の話だが、やはり西行が絡む能の一つ—の復活上演のための改作のとき、露伴のこの『二日物語』が大いに役立ち、そこからいくつかのことも借りたのだという。

崇徳院と言えば上田秋成の「白峯」〔『兩月物語』〕がよく知られているが、

前で「妙法蓮華經提婆達多品第十三」を誦称しているが、言うならばこれがこの一編の思想だ。提婆達多は釈迦教団のなかの反逆者、裏切り者である。東洋版のユダであり、メフィストフェレスである。崇徳院は悪魔に身を委ねた大魔王であるが、その彼に、「仏陀は智なり、朕は情なり」と露伴は言わせている。この知と情の対決は結局勝敗は決せず、最後は幻と消えて、経を読む西行だけが残されて終っている。それが「此一日」である。

後編「彼一日」は、エピソード自体は説話集『選集抄』によったものであろうが、西野春雄によればやはり古い能に「初瀬西行」があるそうだ。ついでに記しておく、能には西行自身がシテ、主役になったものは一つもない。それで、このこともなかなか考えさせる事実だ。露伴は、文章も一変して歌舞伎の世話物調に仕立てている。西行が長谷寺の観音堂に夜籠りをしていると、熱心に祈りをささげていた一人の女人が立ち去ろうとする。その姿に感動した西行が歌を詠みかけると、その

露伴にもあったとは初めて知った。早速読んでみたが、これがいやはやで、とても難しい。秋成の「白峯」のかたちを踏襲しているのは分かるが漢字漢語故事仏典の細密なパッチワークで、気楽な流し読みなど許さない代物だった。全集の書誌解題によれば、明治三十九年には早くも「註釈二日物語」（沼田頼川）なる書物まで出ていたというのだから驚く。難解は発表当時から定評、初めから古典扱いだったわけだ。露伴がこの作を完成したのは三十四歳だが、初稿は二十五歳のとき発表されているというのだから恐ろしい。

『二日物語』はタイトルどおり「此一日」と「彼一日」の二編からなっているが、西行の生涯から二日だけを選ん

声を聴いた女人が身を投げるように寄ってきた。かつて彼が棄てて来た妻だったのだ。西行はそこで捨ててきた家族のその後の運命を聞くことになる。西行と別れて間もなく妻は出家するが、そのとき、例の縁側から蹴落としてきた、六歳だった娘は養女として叔母に託される。同年の娘のいた叔母は、初めは二人を甲乙なく育てるが、西行の娘の方が明らかに容姿も知能も優れていた。そして十六歳になった時、右大臣の御曹司に見初められる。すると叔母の態度が一変して、養女を虐待するようになった。自分の本当の娘と入れ替えさせたいためである。実母はそれを知って「魂魄を煎らるる思」いをするが出家の身としてどうすることもできないと、涙ながらに訴えるのだ。

さてどうなるか。西行もいよいよ追い詰められた。露伴もなかなかやるなあと思むことになるが、展開は次のようになる。

訴えを聞いた西行は静かに言う。実は五日前、自分は娘に会ってきた。そして出家を勧めると彼女も得心して、

で一对の物語としているところが一つの趣向である。前編「此一日」は西行が崇徳院の墓を詣でた故事で、現れた崇徳院の怨霊と問答する話である。旅の僧が土地にまつわる霊から身の上話を聞いて慰霊し弔うのは夢幻能の基本で、秋成の「白峯」もそのスタイルに乗せているが、露伴はさらに徹底して、地の文まで謡曲調、「鳴立沢の夕暮れに笛を停めて一人嘆き……」といった具合に、西行の歌を幾つも地の文に折り込むという凝りようである。現代小説は全く忘れていたが、物語時代にはこうした文章自体のパフォーマンスが一つの見せ所であり読む楽しみでもあった。露伴の面白さや実力はこういうところにもあったのだが、しかし、今はそれが反って彼の文学から人々を遠ざける原因になってしまったわけだ。

崇徳院の墓の前で、秋成の西行は「金剛経」—巻を供養したとされている。「金剛般若波羅蜜多経」は悪魔に勝って煩惱を断つ功德のある経だとされているから、これはまあ常識的な配置であろう。それに対して露伴の西行は墓

喜んで父上の御後に従わんと言いい、その場で髪を切ってきたのだ、というのである。

何だそんな手があったかと、肩透かし、期待外れ、現代では笑い話にもならない展開だが、これが露伴時代の限界であり、また特権であったかもしれない。ただし、ここで露伴が引いている西行の歌はただ一首、結末近くの地の文に折り込まれた、「世を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」である。なかなか痛烈な一撃だと言わなければならない。恰好良く世を捨てた西行の身近なところに、こんなふうな世を捨てざるを得なかった人、世から捨てられた人もいる、それが現実の、本当の「世を捨てる」実態だということになるのか。ちなみに、この「彼一日」の冒頭は、「頼み難きは我が心なり、事あれば忽ちに移り、事無きもまた動かんとすと」と書き出されている。少し飛躍するが、前編後編併せて、人間は意識一枚はがしてみれば、その下には、こんなふうな地獄を抱えている、ということになるのか。